

ジャングルジム登りが可能な発達の要因について

東 間 翔 子

(東京都杉並区立高円寺東保育園)

[研究目的]

乳幼児の身体発達において、よじ登りの重要性はゲゼルによって既に述べられている。保育所のジャングルジムなどは1.6歳の園児が登ってしまう。登ることは好まれる遊びであるが同時に転落の危険性もはらむ。安全と自発性の間に立ってまず保育者が当面するのは登りが可能な発達を掌握していくことと思われる。前43回大会においてはジャングルジム登りの臨界期をさぐり、安全面を含めて3.6歳前後と発表した。

しかし、登りに必要な要因は身長も関与するであるという疑念が残った。そこで今回は遊びの中で実験を重ね、登りができた時点での身長と年齢の二点を取りあげて登りが可能な要因の強さを再研究してみた。

[研究方法]

複数担任が日常の全般的な遊びを見てジャングルジム登降の発達程度を評価する。ジャングルジムに鉄パイプの横棒を固定し、地上からの高さを4段階とし、登れた高さを記録する。被験者はジャングルジムの上部にとりつけたシンバルを打ち鳴らして降りてくるという遊びの中で実験者が記録した。

上記の二点を身長別表・年齢別表にあらわして考察してみた。

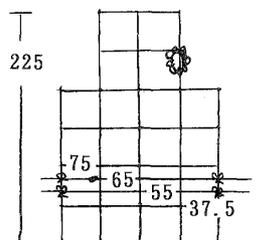
1) 担任による評価の方法

- (a) やりだせばほどなく上手に登降できる(臨界期)
- (b) まだ当分の間不安定期が続く
- (c) 技術的に無理、殆ど登っていない

複数の担任が揃って(a)とした子供のみを○印として示した。

2) 実験の方法

ジャングルジム使用鋼管径25.4mmに固形パイプを固定し、地上より登り得る高さを選んで上部のシンバルを鳴らし降りる。(単位cm)



場 所 高円寺東保育園々庭のジャングルジム
 被験者 0・1・2・3・4 歳児組 (意欲ある者のみ)
 評価者 担任・実験者
 評価方法 A-可 B-難あるも可 C-全く不可

3) 評価・実験の期間・人数

	評価記入期	実験の日時	被験者(0~4歳児)
第1回	平成元年 11/28-12/1	平成元年 12/4-12/6 10-11am	男31 56名 < 女25
	平成2年 6/6-6/11	平成2年 6/11-6/13 10-11am	男21 41名 < 女20
第3回	平成2年 11/26-11/30	平成2年 12/3-12/5 10-11am	男36 67名 < 女31

4) 図の作成方法

被験者中より身長順・年齢順に各々116を高さ別に4段階に記す。線上男児、線下女児。登りの評価はA B別、臨界期評価は○で囲んだ。Cは登り不可の者。

[結果と考察]

結 果

身長別登りの特徴

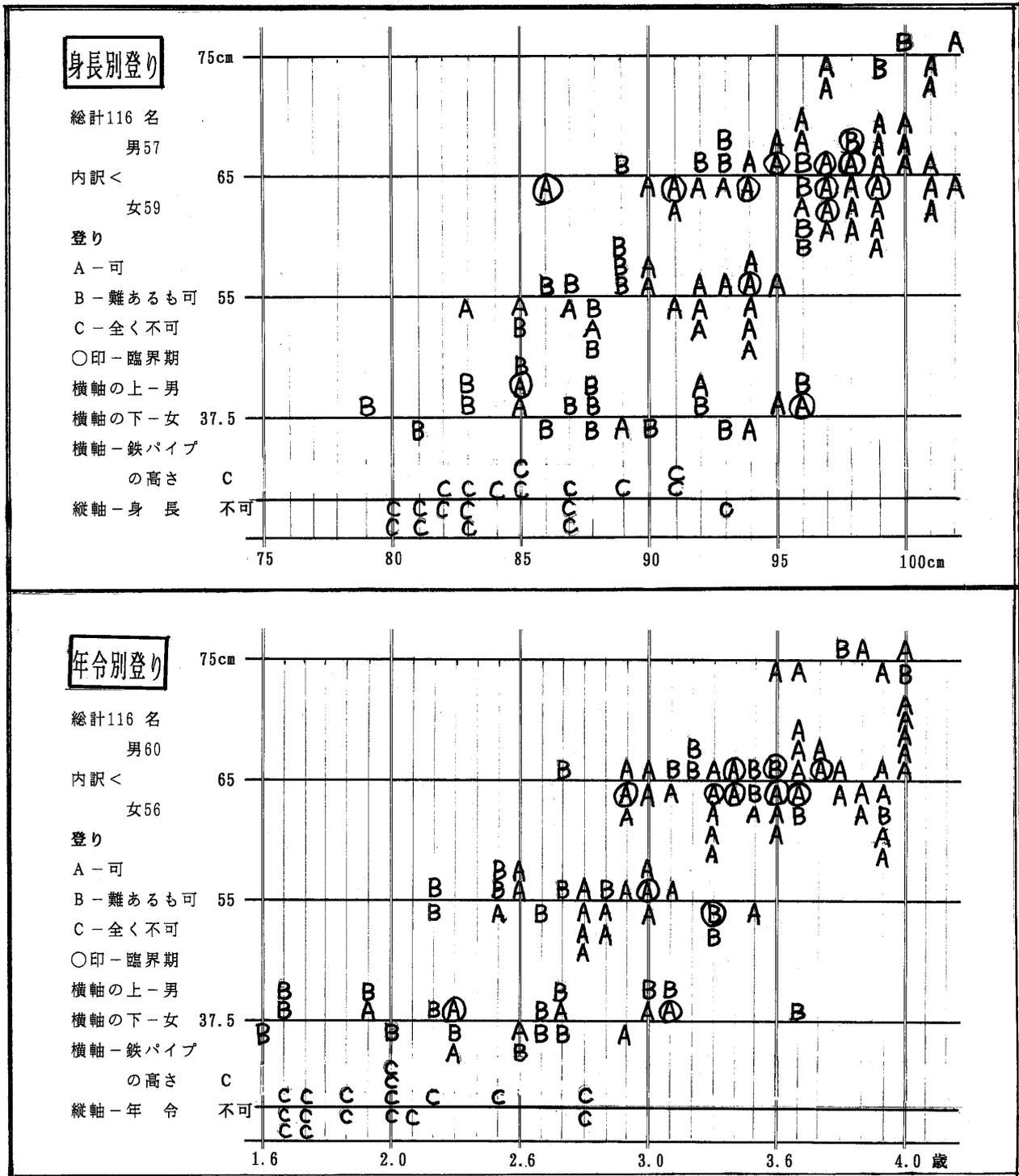
- 1) 身長が高くなるほど高い所へ登れる
- 2) 男女の差はほとんど見られない
- 3) 身長95-99cmに臨界期の評価を受けた者が多い
- 4) 身長97cm以上者は全員65cmに登れる
- 5) 身長104cm以上者は全員75cmに登れる
- 6) 身長93cm以下者は登れる高さが4段階に分かれる

年齢別登りの特徴

- 1) 年齢が高くなるほど高い所へ登れる
- 2) 男女の差はほとんど見られない
- 3) 年齢3.3-3.8歳に臨界期の評価を受けた者が多い
- 4) 年齢3.7歳以上者は全員65cmに登れる
- 5) 年齢4.6歳以上者は全員75cmに登れる
- 6) 年齢2.9歳以下者は登れる高さが3段階に分かれる

考 察

身長、年齢が高いほど高所に登れ、男女差が特に見られず臨界期評価もほぼ固まった場所に出現している。違いを指摘するなら、上記6)項であろう。身長別図では86-93cm間で全く登れない者から65cmをクリアできる者まで4段階に分かれる。一方年齢別においては2.1-2.9歳間で3段階に分かれることである。身長図より年齢図の分布が全般的に重なり方がやや少なく右に流れて見える。このことは個人差等があるにせよ登りが可能な発達は、どちらかといえば身長よりも年齢の要因が強いことをあらわしている。



[結論]

三回の実験等でジャングルジムに登れる要因は、個人差等はあるが第一番目は年齢、次にやや下って身長となり、男女差は殆ど認められないという結論を得た。いうまでもなく研究本来の目的は乳幼児の自発性と安全性を求めて従来の園庭固定遊具の改革を進めていくことである。

しかし、特に満3歳以下の乳児と大型遊具に関する身体発達の研究は未開の分野が多い。日常の保育にも発達をpushすることがその基本である。登りだけに限らずもっといろいろな他の体の働き等を明らかにしつつこれと併行して遊具の評価や開発に努力を重ねていくことが、保育者の今後の大きな課題である。